

平成 24 年度
広島市教育センター

幼児の人とかかわる力を育てるための
教師の幼児理解とよりよい援助に関する研究
— 幼児の行動と内面を関連付けた見取り表の活用を通して —

広島市立大町幼稚園教諭 竹内美貴

研究の要約

本研究は、幼児の人とかかわる力を行動と内面を関連付けながら見取り、実践保育と分析により教師の幼児理解と援助について探っていくことを目的としたものである。その際、「幼児の行動と内面を関連付けた見取り表」を作成し、活用した。

その結果、幼児の行動から内面を推測する、推測したことをもとにかかわる、反応から新たに推測するというくり返しを行うことで徐々に教師の幼児理解が深まっていった。

さらに、保育カンファレンスで見取り表を活用することで、幼児の思いを教師間で共通認識することに役立ち、幼児の思いに寄り添う教師のよりよい援助に有効に働くことが分かった。

キーワード：人とかかわる力，幼児理解，援助

行動と内面を関連付けた見取り表，思いに寄り添う

I 問題の所在

文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会では、近年の子どもの育ちの変化から、幼稚園教育の課題の一つとしてコミュニケーション能力の不足¹⁾を指摘している。『幼稚園教育要領』の領域「人間関係」においても、「一人一人を生かした集団を形成しながら人とかかわる力を育てていくようにすること。特に、集団生活の中で、幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自信をもって行動できるようにすること。」²⁾とあり、人格形成の基礎として人とかかわる力を育てることが重要であると示している。所属園においても、集団生活の場面において自己表出が難しく、自分から人とかかわることができにくい幼児の姿が見られる。それらの幼児に対し援助を行ってきたが、主体的にかかわる行動につながりにくい現状があった。その要因としては、幼児の思いに寄り添った援助が十分ではなかったことが考えられる。

そこで本研究では、「幼児の行動と内面を関連付けた見取り表」を作成し、自己表出が難しい幼児に対するよりよい援助について研究することとした。

II 研究の目的

自己表出が難しい幼児に対し、幼児の思いに寄り添うための「幼児の行動と内面を関連付けた見取り表」を活用した、教師のよりよい援助のあり方について探る。

III 研究の方法

- 1 研究主題に関する基礎的研究
- 2 「幼児の行動と内面を関連付けた見取り

表」の作成

- 3 実践保育の計画と実施
- 4 実践保育の分析と考察

IV 研究の内容

1 研究主題に関する基礎的研究

(1) 幼児の「人とかかわる力」について

教育基本法第11条には「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」と規定されている。

また、『幼稚園教育要領解説』では、「人とかかわる力の基礎は、自分が保護者や周囲の人に温かく見守られているという安定感から生まれる人に対する信頼感をもつこと、さらにその信頼感に支えられて自分自身の生活を確立していくことによって、培われる。幼稚園生活においては、何よりも教師との信頼関係を築くことが必要である。」³⁾と示している。

さらに、「幼児の生活や遊びといった直接的、具体的な体験を通して、人とかかわる力や思考力、感性や表現する力などをはぐくみ、人間として、社会とかかわる人として生きていくための基礎を培うことが大切である。」⁴⁾とし、「人とかかわる力」とは、人格形成の基礎として、重要な力であることが示されている。

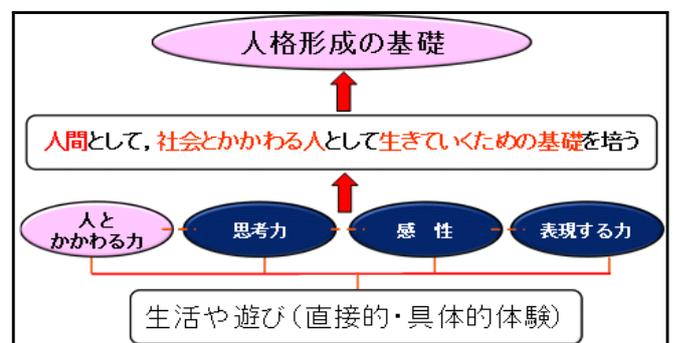


図1 「人とかかわる力」

1) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会（第4期第9回）議事録・配付資料〔資料5-1〕2012年10月27日
2) 3) 4) 『幼稚園教育要領解説』，文部科学省，2008年，110頁，91頁，24頁

(2) 教師の幼児理解について

『幼児理解と評価』では、幼児を理解するとは、一人一人の幼児と直接に触れ合いながら、幼児の言動や表情から、思いや考えなどを理解しかつ受け止め、その幼児のよさや可能性を理解しようとするを指している。そのためには、安易に分かったと思いこんだり、この子はこうだと決め付けたりしてしまうのではなく、幼児と生活を共にしながら「…らしい」「…ではないか」など、表面に表れた行動から内面を推し量ってみることや、内面に沿っていこうとする姿勢が大切である。

しかし、実際には幼児の行動や内面を推測しながらかかわっていても、予想外の姿に気付いて、それまでの見方を変える場合もあるため、図2のような循環の中で徐々に幼児の行動や内面の意味を理解していくことが大切であると示されている。

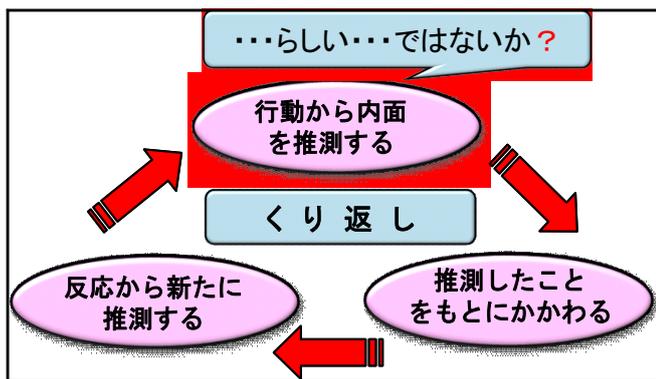


図2「幼児理解」

(3) 教師の役割について

『幼児理解と評価』では、幼児を理解することは、教師の援助の仕方に目を向けることでもあり、教師の援助のあり方との関係で幼児の行動と内面を関連付けて理解しようとするのが保育を見直し、その改善を図るために大切なことであることが示されている。

また、教師は、幼児一人一人の活動場面に応じて様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならないことが、幼稚園教育の基本として示

され、『幼稚園教育要領解説』の一般的な留意事項3章では、教師の役割を次の図3のように示している。

- *活動の理解者としての役割
- *幼児との共同作業・共鳴者としての役割
- *モデルとしての役割
- *遊びの援助者としての役割
- *集団生活における場の構成者としての役割

図3「教師の役割」

(4) パーテン(1932)の遊びの型における人とのかかわり方について

遊びの形態とその発達的变化を検討したパーテン(1932)は、遊びにおける人とのかかわり方から遊びの型を次の図4のように五つに分類し、「2～5歳までは平行遊びが出現する割合が最も高いこと、傍観遊び、平行遊びは2～4歳と年齢が進むにつれて減少し、連合遊び、協同遊びは増加することを見いだしている。」⁵⁾

- ①何にも専念していない行動(目的がない)
- ②傍観遊び(遊んでいる様子をながめる)
- ③平行遊び(同じ遊びをするが交渉はない)
- ④連合遊び(やりとりはあるがまとまりがない)
- ⑤協同遊び(目的のために組織を作って遊ぶ)

図4「パーテン(1932)遊びの型」

(5) 教師の援助の視点について

『幼稚園教育要領解説』では、幼児の行動を見守りながら、適切な援助を行うためには、教師と幼児との間に信頼関係を築き、同時に幼児の言動や表情からその幼児が今何を感じているのか、何を実現したいと思っているのかを受け止め、幼児が試行錯誤しながら自分の力で課題を乗り越えられるようにしていくことが必要であると示している。教師の援助の視点として、図5の視点につい

5)成田朋子, 小澤文雄, 本間章子編著『保育実践を支える人間関係』, 福村出版, 76頁

て配慮していくことが必要である。

『幼稚園教育要領解説』（文部科学省）

【幼児の行動に温かい関心を寄せる】
・ 幼児のありのままの姿をそのまま受け止め期待をもって見守る ・ 他者を必要とするときにそれに応じる姿勢
【心の動きに応答する】
・ 教師が答えを示すのではなく、幼児の嬉しい、悔しい、悲しい、楽しい等の心の動きに沿って応答しながら共に心を動かしたり、考えを出し合ったりする
【共に考える】
・ 幼児の立場に立って幼児の調子に合わせて考える ・ 体の動かし方や視線といった言葉にならないサインを感じ取っていく ・ 結果よりむしろ心に寄り添いながらその幼児らしい考え方や思いを大切にする

『共感 育ちあう保育のなかで』（佐伯胖 編）

【共振（同調的な反響）】
・ 幼児と同じ体の動きやしぐさをしながら教師が幼児にとって「一緒に～すると楽しい」という特別な存在となる
【共感（意図を理解し共有する）】
・ 幼児の抱く世界を「共に」味わい、楽しむ ・ 幼児が行おうとしていることを理解し、共感する

図5 「教師の援助の視点」

2 「幼児の行動と内面を関連付けた見取り表」について

(1) 見取り表活用時の留意点について

「幼児の行動と内面を関連付けた見取り表」（付録）とは、幼児の言動や表情から思いや考えを理解し、かつ受け止め、幼児の思いに寄り添った援助を行うことや、幼児のよさや可能性を理解しようとすることを目的として作成したものである。「…らしい」「…ではないか」等、内面を推測し、教師の主観を加えず、客観的な見取りを行う一つの指標である。

また、パーテン(1932)の遊びの型を用いて①「何にも専念していない行動」から⑤「協同遊

び」へと、遊びにおける人とのかかわり方の発達的变化を表に示しているが、人とかかわる力とは単に人とうまくつき合うことや「協同遊び」に向け多くの人とかかわりがもてるようになることに価値付けをしているものではない。幼児は人とかかわりの中で、衝突やいざこざ等、葛藤を乗り越えていく経験をくり返す中で相手の気持ちに気付くことや思いやりや、やさしさの気持ちを育んでいくものであることを大切にし、活用する際には、あくまでも教師が幼児の見取りを深め、よりよい援助を行っていくための指標であることに十分留意していきたい。

3 実践保育の計画と実施

(1) 目的

「幼児の行動と内面を関連付けた見取り表」（付録）をもとに対象児A児、B児の人とかかわりを見取り、教師の援助について分析、考察する。

(2) 対象

広島市立大町幼稚園 4歳児抽出児（A児・B児）

(3) 時期

平成25年1月8日（火）～1月23日（水）の6日間

4 実践保育の分析・考察

(1) 抽出児の分析・考察方法

- 抽出児(A児・B児)が人とかかわる場面の内面や行動を「幼児の行動と内面を関連付けた見取り表」（付録）からどの発達的变化の過程であるか推測する。
- 保育カンファレンスやVTRから「振り返りの記録用紙」を作成する。
- 「幼児の行動と内面を関連付けた見取り表」（付録）と「振り返りの記録用紙」から行動や内面を分析し、考察する。

(2) 教師が見取りを共有するための工夫

- 「幼児の行動と内面を関連付けた見取表」(付録)を活用した保育カンファレンス
- 「振り返りの記録用紙」への記述

(3) 抽出児(A児・B児)について

ア 抽出児A児

教師が準備している決められた活動では友達と遊ぶことができるようになってきたが、自由に遊びを選ぶ場面では、主体的に遊びを決めたり、選んだり、自分の思いを相手に伝えたりすることができにくい姿が見られる。

イ 抽出児B児

自由に遊ぶ場面では、教師を仲立ちにしながら友達と一緒に遊ぶことができるようになってきたが、集団行動等、一斉活動の場面では自分の気持ちの切りかえが難しく、集団での活動や遊びに参加したり、友達と一緒に行動したりすることができにくい姿が見られる。

ウ 抽出児(A児・B児)の指導に当たって

「幼児の行動と内面を関連付けた見取表」(付録)をもとに、幼児の言動や表情等、行動と内面を関連付け、幼児の思いを推測し、その思いに寄り添った援助を繰り返す保育実践を行う。実践した内容は、「振り返りの記録用紙」に記入し、保育カンファレンスを通して他の教諭と共有することで、同じ視点で幼児に対応することができるようにする。この取組を通して、幼児との信頼関係を深めるとともに、幼児が「できた」「やった」と実感できる体験を積み重ね、人とかかわる力を育てていく。

エ 抽出児(A児・B児)における指導のねらい

(ア) 抽出児A児

- ・自分でやりたい遊びを見つけ、友達や遊具、友達が遊んでいる場にかかわってみようとすることができる。
- ・自分の思いを表情や言動で伝えようとすることができる。

(イ) 抽出児B児

- ・言葉で自分の思いを伝え、友達や教師と一緒に

に「楽しい」「おもしろい」「できた」「やった」という気持ちを共有したり、友達と体の動きやしぐさを合わせて遊んだりすることができる。

- ・自分の気持ちを調整しながら、一斉活動に参加し、友達や教師とかかわろうとすることができる。

(4) 実践事例と分析・考察(A児)

友達が遊んでいる様子を見ている場面は、A児にとっては自分で考えたり、判断したりしている大切な時間であり、この段階で言葉かけをしていたこれまでの保育では、A児の言動をかえって止めてしまっていたことが、保育カンファレンスの中で分かった。見取表をもとにA児に寄り添った援助を行ってきたことで、以前は話しかけても返事が返ってこなかったA児が、自分からたくさん話しかけてくれるようになるとともに、他の幼児ともかかわる場面が増えていった。

【 実践保育 1～4日目 】

A児：室内でみんなが遊んでいる様子を見ている
教師：「やってみる？」言葉かけを中心にかかわりをもととする
A児：返事はなく、表情や体がこわばる 友達が誘っても遊びに加わりたくない

【見取表をもとにした保育カンファレンス】

○ A児のかかわりの段階は、見取表②「傍観遊び」ではなく、①「何も専念していない行動」の段階ではないか、という 見直し をする
○ 言葉かけ中心のかかわりからスキンシップや非言語コミュニケーション中心のかかわりへ変えてみることを確認する

【 実践保育 5日目 】

A児：室内でみんなが遊んでいる様子を見ている
教師： <u>言葉かけに頼らず、視線が合ったときに手を振ったり、笑顔で答えたりして、あなたのことを見ているというサインを送る</u>
A児：友達の誘いに応じて、ままごと遊びに参加する 友達や教師との会話が増える

【見取り表をもとにした保育カンファレンス】

- ①「何にも専念していない行動」の段階だったことを確認する
- 表情やまなざし、スキンシップ等を中心にかかわりA児が自発的に活動を始めた時点で、言葉かけを行うことを確認する

【 実践保育 6 日目 】

A児：室内でみんなが遊んでいる様子を見ている
教師：笑顔やスキンシップ等、非言語コミュニケーションを中心にかかわり 自発的に活動を始めた際に言葉かけをする
A児：ねことねずみごっこに参加する 友達や教師との会話が増える

図6 事例1 (A児)

(5) 実践事例と分析・考察 (B児)

会話からB児の段階を見取り、B児の内面に寄り添ってスモールステップを刻む援助を行うことや、B児のよさや可能性を理解しようとする教師の姿勢がB児の変容につながった。

【 実践保育 1 日目 】

B児：集いに参加せず床に寝ころぶ
教師：「どうしたの？」
B児：「お腹が痛い」表情を歪める
教師：「大丈夫？手をつなぐ？」背中やお腹をさする
B児：笑顔で立ち上がり、見ることで集いに参加し満足している

【 見取り表をもとにした保育カンファレンス 】

- B児はその時々で人とのかかわりの段階が違うように見える
- B児との会話のやりとりを通して段階を見取り
思いに寄りそう援助を行うことを確認する

【 実践保育 2～6 日目 】

B児：友達が遊んでいる様子をそばで見ている
教師：「やってみる？」
B児：自分のペースやルールで遊ぶ
教師：「一緒に～する？」
B児：「先生一緒に～しよう」
教師：B児と1対1のかかわりをもちながらB児と他の幼児とのかかわりをつなぐ言葉かけ等を行う
B児：友達の誘いに応じ、クラスのみんなと集団遊びに参加する（転がしドッジ・ねことねずみ等）

【 見取り表をもとにした保育カンファレンス 】

- B児との1対1のかかわりや会話の中から、B児の現在の人とのかかわりの段階を見取ることが大切であることを確認する
- はじめは、教師が1対1でかかわることでB児が安心、安定して過ごせるようにするとともに、教師を仲立ちとしながら徐々に友達とのかかわりを広げていくようにすることを確認する

図7 事例2 (B児)

V 研究のまとめ

本研究を通して、幼児や職員の変容から「行動から内面を推測する」「推測したことをもとにかかわる」「反応から新たに推測する」というくり返しの中で幼児理解を深め、教師のよりよい援助につながる事が分かった。

また、保育カンファレンスで見取り表を活用することは、『幼稚園教育要領解説』の領域「人間関係」に示されている「教師は子どもの行動をしっかりと観察し、気持ちや欲求など目に見えない心の声を聴き、その内面を理解すること」につながり、幼児の思いを教師間で共通認識することに役立ち、幼児の思いに寄り添う教師のよりよい援助に有効に働くことが分かった。

今後、見取り表に抽象的な表現も多いので、実践に活用しやすい具体的なものにしていくことが必要であるが、幼児理解が保育の出発点であり、そこから一人一人の幼児の発達を着実に促す保育が生み出されていくことを実感できた。

参考文献

- ① 文部科学省『幼稚園教育要領解説』2009年
- ② 文部科学省『幼児理解と評価』2010年
- ③ 佐伯胖（編）『共感 育ちあう保育のなかで』ミネルヴァ書房、2007年
- ④ 成田朋子、小澤文雄、本間章子（編著）『保育実践を支える人間関係』福村出版、2009年

「幼児の行動や内面を関連付けた見取り表」

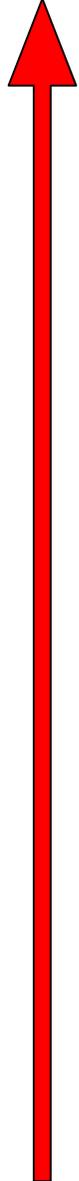
【遊びの型】

(パーテン 1932)

【予想される幼児の行動】

【 内 面 】

【 援助の視点と具体的な援助の例 】



⑤ 協同遊び

- 目的のために組織（リーダーの役割を取る幼児が現れる）を作って遊ぶ
- 役割分担しながら共通の目的やルールに沿って遊ぶ
- 折り合いをつけることが日常的になる

- 「自分のイメージや思いを相手と共有したい」「みんなと一緒に～を達成したい、できた」・・・願いや目的の共有
- 「～を慰めたい・助けたい」・・・思いやり
- 「～と一緒にいると楽しい」・・・相手と共にいることの喜び
- 「～は～と思っているんだ」・・・相手の思っていることへの気づき
- 相手の立場を理解
- 「～は～が上手」「～は～が好き」・・・互いのよさや特性への気づき
- 願いや目的を共有し、遊びの楽しさや醍醐味を感じる充実感、満足感
- 「自分は～しよう」「～しなければいけない」・・・集団の中の個人の役割や責任の自覚
- 「きまりを守って遊びたい、生活したい」・・・きまりの理解

【⑤共感（意図を理解し共有する）】

- 幼児の抱く世界を「共に」味わい、楽しむ
- 幼児が行おうとしていることを理解し、共感する

【具体的な援助の例】

- 「～をがんばっていたね」と幼児の感動や努力、工夫等を温かく受け止め、認めたり、「～を試してみては？」と手助けをしたり、「～なんだね」と相談相手になったりする
- 「～と考えていたんだね」「～をしてくれたんだね」等、幼児が何気なく行っていたことや話したことの意味づけや価値づけをする
- 幼児と遊んだり、活動したりしながら幼児の抱くイメージや世界と一緒に味わい、楽しむ
- 「幼児」と「幼児の視線の行き先」と「幼児の周囲の状況」を統括してとらえ幼児が行おうとしていることを理解する

④ 連合遊び

- 他の幼児とおもちゃや、遊具をやりとりしながら一緒に遊ぶが、全体のまとまりがない
- トラブルが多発する
- 自分を主張する

- 「楽しい」「おもしろい」・・・お互いを意識し、思いを共有
- 「～は～と思うんだ」・・・自分と異なったイメージや考え方をもちた存在への気づき
- 「～しなければいけないんだ」・・・よい行動や悪い行動、きまりの大切さへの気づき
- 「自分で解決したい」・・・責任感
- 「自分は～したい」「～と思っているのに」・・・葛藤
- 「～して悔しい」「～が悲しい」「～に腹がたつ（怒り）」等・・・負の感情
- 「～が嬉しい」「～は楽しい」等・・・快の感情

【④共感（同調的な反響）】

- 幼児と同一体の動きやしぐさをしながら教師が幼児にとって「一緒に～すると楽しい」という特別な存在となる

【具体的な援助の例】

- 幼児が声を出せば同じように声を出す、動き方を変えれば自分も変える等、幼児の動きやしぐさから楽しんでることやものを見つけ出し、同じ動きをして、一緒に遊びを楽しむ
- 「一緒に～すると楽しい」という心地よい快の感情を多く積み重ねる
- 遊びのイメージが膨らむように、ごっこ遊びの役になりきって会話のやりとりをする
- 遊びに必要な材料や用具等を共に準備する
- 「～という気持ちだったんだね」と、トラブルの場面では教師が仲介役となりながら互いの思いに気付かせていくようにする

③ 平行遊び

- 他の幼児のそばで同じ遊びをするが、子ども同士の間には具体的な交渉（交流）がない
- 自分のペースやルールで遊ぶ

- 他の幼児に対する関心の高まり
- 困ったことが起きると援助を求めたい
- 自立心（自我の芽生え）
- 「自分でやり遂げた」満足感
- 「自分が思ったことができた」喜び、達成感
- 「自分でやってみよう」自発性の芽生え
- 「自分の思うように、やりたいようにしたい」
- ルールや遊び方が分からない

【③共に考える】

- 幼児の立場に立って、幼児の調子に合わせて考える
- 体の動かし方や視線といった言葉にならないサインを感じ取っていく
- 結果よりむしろ心に寄り添いながらその幼児らしい考え方や思いを大切にすること

【具体的な援助の例】

- 幼児なりのペースやタイミングを笑顔で待つ
- 「一緒に～する？」等、幼児同士や幼児が行っている遊びをつなぐように誘う
- 遊びのルールや内容を理解しやすいように視覚教材を活用する
- 「すごいね」と遊びの中の幼児の発想を認めたり、つまづきを励ましたりする
- 「どうやって遊ぶの？」と聞きながら幼児の遊びを共有する

② 傍観遊び

- 他の幼児が遊んでいるのを見て質問したり、遊びに口出ししたりもするが遊びに加わらない
- 他の幼児と関係をもたず、自分だけの遊びをしている
- 使いたい場所や遊具の順番を待っている
- 他の幼児が遊んでいる様子をながめている（遠く→近く）

- 他の幼児に対する関心の芽生え
- 「～がしたい」という意欲の芽生え
- 「～が好き」等、物へのこだわり
- 友達が遊んでいる様子を見ていることで参加したつもりで満足
- 自分の居場所ができ、安心、安定

【②心の動きに応答する】

- 教師が答えを示すのではなく、幼児の嬉しい、悔しい、悲しい、楽しい等の心の動きに沿って応答しながら共に心を動かしたり、考えを出し合ったりする

【具体的な援助の例】

- 「やってみる？」等、遊びに誘う
- 幼児の気持ちや思いに笑顔やうなずきで応答する
- 「楽しいね」「嫌だったね」等、幼児の思いを代弁しながら思いに寄り添う
- 「～を使ってみる？」等、ヒントを与えながら自ら工夫してやろうとしている遊びの援助者になる

① 何にも専念していない行動

- じっと座っていたり、何もしないで歩き回ったり、あちこちを見回したり、目的がない
- 床に寝転がったり、その場から動こうとしなくなったりする

- 教師のそばにいてことで安心、安定
- 何をすればよいか戸惑い、不安
- 目的がもてない
- 何をしようか迷ったり、考えたり
- やりたいことが十分出ず、不満足

【①幼児の行動に温かい関心を寄せる】

- 幼児のありのままの姿をそのまま受け止め、期待をもって見守る（肯定的な教師のまなざし・表情）
- 他者を必要とするときに、それに応じる姿勢

【具体的な援助の例】

- 「どうしたの？」「何を？」等、思いに寄り添いながら気持ちを聞く
- 一つの物事にじっくりと取り組める、遊びの場や時間を保障する
- 手をつないだり、背中をさすったり等、スキンシップをとり、安心や安定を図る
- 言葉かけに頼らず、視線が合ったときに手を振ったり、笑顔で答えたりし、あなたのことを見ているというサインをおくる（表情やしぐさ等の非言語コミュニケーションを中心にかかわる）

『共感育ち合う保育の中で』（佐伯 胖 編 2007）
 『保育実践を支える人間関係』（成田朋子・小澤文雄・本間章子 編著 2009）
 『幼稚園教育要領解説』（文部科学省 2008）